



# 新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳  
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

わが家のポストにたくさんの展覧会のご案内が届き、ワクワクする芸術の秋の到来だ。  
 絵を描けないものにとっては気楽に拝見する作品だが、作家たちはどれほどの時間と思いを込めて創られたのか、最近そのことの大きさを拝見するたびに感じるようになった。

10月はおでん祭り、映画祭、ミュージックストリート、絵画展、音楽会など特色ある小田原文化祭で賑わう。創る人・参加する人、それぞれの思いを今年も参加することで共に楽しみたい。

## 新九郎 10月の展覧会のご案内

## 近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 第13回(2013) 新樹日本画展 安藤 康・片岡 暁・加藤 水紅 藤村 隆次・住野 清子・豊橋 勲子 中野 貴子・中村麗代美 (伊勢治書店)	小田原を中心とした会員で、毎年発表している日本画のグループ展。会員 8 名
 10/9(水)~14(月) 第11回 円居会作陶展	南足柄に窯を持つ、西静恵先生の教室作品展。
 10/16(水)~21(月) 第13回フォト∞ムゲン写真展	7名の会員による写真展。日本各地の風景、行事、暮らし等、約60点
 10/18(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ
 10/23(水)~28(月) 第14回 人生遊々展	旧三中三期生による作品展 水彩・油彩・水墨画・書・絵 てがみ・写真・盆栽・花・人形・陶芸等
 10/30(水)~11/4(月) 第16回 湘展	絵画教室の作品展 身近な風景や静物等の水彩・油彩 講師：住谷重光氏

会期・展覧会名	会場
10/3(木)~7(月) 第17回百景展	アオキ画廊 1.2F 0465-23-5624
10/24(木)~29(火) スケッチングウォークの会 小田原グループ展	ツノダ画廊 0465-22-4263
10/9(水)~14(月) 第七回 楽の会 水彩画展	お堀端画廊 0465-23-7819
10/23(水)~28(月) 第35回 グループ・アトリエ展	お堀端画廊 0465-23-7819
10/2(水)~7(月) 下園功絵画小品展	ぎやらりーぜん 0463-83-4031
10/5(金)~10/11(月) 脇嶋通個展	丹沢美術館 0463-83-9550
10/11(金)~10/15(火)白石洋子 ヨーロッパスケッチ展	アートギャラリー陶彩 0465-43-2852
10/2(水)~10/6(日) 第10回パレットクラブ絵画展	大磯町立図書館 2F 展示 0463-61-3002
10/16(水)~10/20(日) 第78回西相展	小田原市民会館 0465-37-8543(田嶋佳子)
10/1(日)~10/6(日) 42nd 南足柄市美術展	南足柄市文化会館 0465-74-0772(湯川方)
10/2(水)~10/6(日) 第65回湯河原美術展	湯河原町立図書館 3F
10/29(火)~11/3(日) 第1回友彩会透明水彩作品展	おだわら女性プラザ CHAT 0465-22-3719

### 東海道五十三次 2. 神奈川宿(本覚寺)

5年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行 松野光純



新子安駅を過ぎると神奈川宿に入る。昔の東海道は海に沿って延びており、ここ神奈川宿もちょうど東海道有数の景勝地である「袖ヶ浦」のそばにあった。

絵では、海に面した街道沿いに茶屋がならんでいる様子が描かれているが、当時の海岸線は明治以降に埋め立てられたため、残念ながら今はその面影はない。

神奈川駅の裏手の高台に本覚寺という寺がある。この寺は、開港当時には、アメリカ領事館にあてられ、日米修好通商条約でアメリカ公使ハリスとの交渉にあたった、全権委員・岩瀬中震の石碑が境内にある。この寺以外にも神奈川宿内の寺院は、各国の領事館として利用された。

### 思うことなど 横井山 泰



絵本の作業がほぼ終わりかけた頃。何人かの方に観せ、ご意見をいただいた。同じことを学校の子どもたちにもした。文学部で教鞭をとっている友人と、ある子どもの指摘がまるきり同じだったことに驚いた。「主人公が旅に出る物語なのだが、旅に出る理由が解らない」という指摘だった。その子に「どうしたら解る？」と聞いてみると面白いアイデアを出してくれた。本の印刷はお世話になっている K さんのいる文化堂印刷である。実は妻の昔の職場で、担当の方々は彼女の元上司である。人の繋がりには本当に有難い、絵本は11月に完成予定！！

11月は盛りだくさんで、2日から4日にオープンアトリエ (ASHIGARA アートフェス参加企画) を企画している。「非常の日常」と題してグループ展、ワークショップ、落語会 (立川志ららさん、笑福亭瓶二さん) である。「僕にとっては日常であるアトリエも他の方には非日常な場所。そんな場所で誰かにとっては日常的なことをして、それを非日常として観てもらおう」という趣旨。18日からは銀座のニッチギャラリーで個展、秋の夜長は制作三昧である。

オープンアトリエ お問い合わせは yasushi@yokoiyama.com までお願いします。落語会は11月4日(月祝) 16時~18時 チケット1000円です。

## 第24回 アトリエ訪問

安藤 勇 小田原市本町在住

『新樹会』の第13回目の展覧会が今年も行われる。新樹会の世話人をされているのが安藤勇さんだ。歯切れのよい話し方、背筋の通った姿は全く年齢を感じさせない、気風のよい男の魅力に溢れた方だった。長年重責を担う仕事をされてきた仕事一筋の生活の中で、どのように日本画と出会い、どんな学び方をされてきたのか、興味の湧くところであった。



アトリエは、お住まいの向かい側に建てられた一軒家の2階にあった。障子を通す柔らかい光に満ちたアトリエは広々とした和室だった。壁一面の書棚は画集や本でびっしりと埋め尽くされ、研究熱心な方であることが伝わった。「ここが私の住処です。」と机の前に座られた。座布団の周りには瓶に入った色とりどりの岩絵の具、絵の具を溶く皿、様々な筆、木をくりぬいた素敵な火鉢があった。ここで膠を溶かすのだそうだ。壁には作品名制作日の描かれた作品が立てかけられ、これから出す展覧会の作品が準備されていた。板に和紙を張り裏打ちされた台紙も、すべてご自分で作られるのだという。

ご自身も、現在のように絵を描く生活になろうとは予想もしないことだったと振り返る。その原点は幼少期にあった。「御濠端幼稚園」の頃「おもちゃの兵隊」の絵を、創始者の浅野子爵夫人がずっと飾ってくださったことを今でもはっきり覚えていた。小学校時代もずっと絵の成績は満点、素質は抜きんでていた。その後戦争が始まり、紙もない画材もない時代で、絵のことはすっかり忘れていた。

そんな安藤さんに「人生の師」と仰ぐ先生との出会いが訪れる。大学

卒業後、仕事を通じて日本画家「上垣候鳥うえがきこうちょう」と出会う。昭和42年35歳の時だ。人間としての魅力に惹かれこの人なら学んでみたいと門をたたいた。仕事盛りであって、会社の帰りに習いに行けたのは、3、4か月。その後は、休みの日に描いたものを持って行って指導を受けてきたという。

日本画は絵の具の扱い方が難しい。絵の具の扱いや描き方を学びたかった安藤さんは、先生の描いているところに出向いていき、先生の描く作品をじかに見て学ぶことで、言葉は悪いが盗み取ってきたのだという。黙っていても指導されない先生に、とにかく聞いて聞いて聞きまくったという研究熱心な安藤さんらしい学び方である。意欲ある生徒には惜しみなく教えてくださった先生。先生を決して真似ず個性溢れる作品を描く安藤さんはめきめきと頭角を現し、翌年昭和43年に出品した西相展で奨励賞を受賞する。

昭和50年には西相展会員に推挙、平成18年には会員努力賞受賞、昭和51年には市展招待出品となり、市展では20年にわたり審査員を務めている。その後毎年5回の展覧会（新春展・市展・西相展・春秋の喜楽舎展）への出品をずっと続けてきた。そして「上垣候鳥」没後3年を機に、平成12年新樹会を立ち上げた。故黒柳武氏や故国原みち子氏と共に10名でスタートした新樹会展は、今年で13回目を迎えた。

安藤さんは平成12年小田原市民会館で個展を開いた。仕事を完全に離れ時間ができた66歳からの10年間、今までの溜まっていた制作への情熱を一気にぶつけたかのような大作の数々は、観るものを圧倒した。集大成の作品集は1冊の画集となって残っていた。この個展の様子は神静民報・神奈川新聞にも取り上げられ、その豊かな日本美を感性豊かな作品と評された。アトリエの屋根裏に作られた収蔵庫で大切に保管されている2双1曲の屏風をみせて

いただいた。目の覚めるような青で描かれた丹沢と空、周りに描かれる草木は、一つ一つが力強くしっとりとした空気に包まれてそこに生きていた。また、小田原の景色を描いた大作は、東泉院や箱根病院の入り口に飾られ今も多くの人々を楽しませている。

西洋のものは合理的だが東洋のものは手間がかかると話された。岩絵の具を膠で溶くが、冬は膠がすぐに固まってしまい、後で手を入れようと思ってもそのひと筆を入れることがとても手間のいる仕事らしい。立てて描くと垂れるため、平で広い場所がいる。また小さな瓶に入った青の岩絵の具に56000円と書かれていたのにも驚いた。画材がとても高価なのだ。これを続けられるのはやはり選ばれた人という事になる。

安藤さんの作品は風景、草木が多い。やはり自然から受ける感動が一番大きいという。「水と空の感じられる作品を描け」という師の言葉を常に意識して「日本の良さ」を描いてきた安藤さんにとって、一番自分を表現しやすいのが日本画だったという事だ。安藤作品の醸し出すしっとりとした画面は、絵の具を重ねて重ねて生み出されていた。この下地作りに1週間を要し、地の色が全部乾いてから重ね塗りをしていく。混色も絵の具の粒子の違いがあり、軽い粒子は上に浮き重い粒子が沈むため、今でも思い通りの色を出すのは難しいという。表したいものが出てくるまで5回も10回も重ね色を出していく。安藤作品の大胆でありながら大らかな包み込まれる美しさは、こうした手間暇を惜しまない丁寧な手法とち密な計算された技術であることを初めて知る事が出来た。油絵のようにやり直しのきかない手法、膠の固まる前に描ききるといふ緊張とスピード今まで知らなかった日本画の奥深さに触れることのできた貴重なアトリエ訪問となった。(新九郎友の会 木下和子)

九月のこと  
飯室哲也展「観念、感覚、事物、空間の往来」1970年代から現在」がモンミューゼ沼津（沼津市庄司美術館）で開かれていた。飯室氏には2009年に新九郎の個展を開催して頂いた。今展はタイムルにある通り、1970年代（20代）の現在迄の代表的な作品が、年代順に展示され、氏の芸術活動の変遷が良く分かるように展示されている。最近の平面作品「ゴーギャン追想」は若い時代に傾倒した作家に思いを馳せ、色彩は明るさを増し、激情がほとばしるように感じられる。飯室氏は十一月に開催される、現代美術展「小田原ビエンナーレ2013」を主催している。十六作家が参加し、清閑亭ははじめ、小田原の六会場で開催される。この庄司美術館は、一階が企画展示室、二階が書齋と常設展となっている。奥の一面に梅原龍三郎、中川一政、林武の薔薇の絵が三枚並んでいた。梅原の絵は両脇に中川、林の絵を従え堂々たる感じである。梅原の絵にしては色彩がやや薄い感じがするので、キャプションを見ると水彩とある。驚いた。普通水彩という油絵の持つ物質感、色彩の強さには適わず、良い絵でも油絵のなりに置く油彩である。しかも中川、梅原の薔薇は画格の大きさが悠然として他を圧倒していた。他に佐伯祐三のパリの街角の絵があった。グレーの空に覆われた街、憂愁の漂う魅力的な絵だ。こじんまりとした空間だが、他に客もなく落ち着いて鑑賞することができ、久々に心の安まる時間であった。長谷川瀧二郎展でもそうであったが、小会場が良いこともある。平塚市美術館では大会場で点数も多く見応えがあったが、松永記念館の展示も素晴らしかった。点数は少ないが名品揃えで、会場と周りの場のたまたまを引いて、会場と合っている。松永記念館を美術館としての活用を高めると謳っている。小規模でも会場に合った良質な企画展を開催していくことを願う。